

継承・発展のための新たな試み

子供たちの学び・教育の現場「地蔵盆」

— 同志社大学の学生団体「edunka」の活動 —

私たち^{えでゅんか}edunkaは、同志社大学社会学部教育文化学科の杉野紗世、矢野佑樹、森本陽介、由利拓真、牧弥佑の5名からなる学生団体です。私たちは、やりたいことがわからないと悩む大学生に「興味関心の種をまく」というスローガンのもと活動しています。また、大学では「子供たちの学び・教育」について学んでおり、子ども時代の遊びや伝統の文化に触れることは人生においてかけがえのない経験であるという思いを持っています。

今回、私たちはそのような思いから新型コロナウイルス感染症によって京都の多くの地域で数年開催されていなかった伝統行事「地蔵盆」に着目しました。まずは、令和5年6月10～11日にゼスト御池地下街で開催された「京の地蔵盆・夏祭り相談会」（京都市などが主催）や、上京区担当のまちづくりアドバイザーと一緒に、区民が集う「上京朝カフェ」（毎月第4木曜日、朝8時～）に参加しました。それらの活動を通して、室町スカイハイツ（8月20日・日曜）と堀川団地（8月27日・日曜）の2つの地蔵盆で、運営のお手伝いをするようになりました。

主な役割は、主催の町内会役員との打ち合わせや、地蔵盆に関する紙芝居、告知チラシや当日のプログラム作成です。特に、地蔵盆の体験を子どもたちの記憶に残る時間にしたいという思いから、プログラムの企画考案に力を注ぎました。室町スカイハイツでは、「お地蔵さん探し」を行いました。これは宝探しから着想を得ており、建物内の至るところに隠された、折り紙で作ったお地蔵さんを探すゲームです。活発に体を動かして、笑顔でお地蔵さんを探す子どもたちの姿はとても印象に残っています。堀川団地では「灯籠作り」を行いました。これは牛乳パックの灯籠に子どもたちが好きな絵を描いたり、形を切り抜いたりする工作です。教育文化的な視点から考えても、子どもたち自身の想像力を形にして表現するという経験は、発達において意味のある機会になったと思います。紙芝居の準備は大変でした。実は5人のなかで京都出身者は1人だけでしたので、まず地蔵盆に関して一から勉強し、そのうえで紙芝居を手作りしたのです。紙芝居には効果音やBGMを用い、登場人物によって読み手を変えるなど、より臨場感のある演劇要素を取り入れました。こうした工夫によって子どもたちも興味を持ち、紙芝居後に心理的距離を大幅に縮めることができました。

後日、町内会役員や親御さんから「今回の地蔵盆を通して、面識のなかった住民同士で関わりを持つことができた」とお聞きしました。子どもたちの特別な思い出を作りたいという思いから始めた地蔵盆の活動でしたが、結果として地域の住民を繋ぐことができ、また、コミュニティの活性化にも役立つことができ、私たちが大学の枠を越えて行動することによって様々な良い影響を与えられるのだと実感しました。こうした経験を、やりたいことがわからないと悩む大学生に広く伝え、興味関心のきっかけとなるよう、今後も精力的に活動していきます。

（文・写真 牧 弥佑）



2023年のedunkaメンバー



堀川団地での紙芝居



室町スカイハイツでのスーパーボールすくい